しろいゆきあかるいゆき

アルビン・トレッセルト　さく
ロジャー・デュボワザン　え
えくに　かおり　やく
ブックローン出版　１９９５年　１３２３円
３２ページ　２７×２３cm

雪の降る予感から、雪の季節、雪解けそして春の訪れまでを描いた絵本。雪の予感に皆が空を見上げ、雪に備えてゴム靴を履いたり、雪かきのシャベルを用意したりします。そして雪は降り、降り積もり、家々や道をすっかりうずめます。雪に足を滑らせる人、雪かきをする人。子どもたちは雪だるまを作ったり雪合戦をして遊びます。やがて風が吹き、日毎に日差しが強くなり、雪解けの季節へ。春の予感を感じる頃、こまどりが春を告げるのです。
冒頭の詩も含め、とてもやさしい文章が、雪のやわらかさや冬の厳かな雰囲気、春の暖かい風や光を効果的に表しています。雪の少ない地域に住む子や雪を知らない子にも、雪をやさしく伝える一冊です。

スーホの白い馬

モンゴル民話
大塚　勇三　再話　赤羽　末吉　画
福音館書店　１９６７年　１２６０円
４８ページ　２４×３１cm

昔モンゴルの草原に、スーホという貧しい羊飼いの少年がいました。ある日、スーホは産まれたばかりの白い馬を拾います。心を込めて世話した馬は、やがて立派に成長し、スーホは人に勧められ、殿様の開く競馬大会に出場することにしました。スーホは見事優勝しますが、殿様に白馬を取り上げられ、いためつけられます。床に臥したスーホの傷が癒える頃、殿様の所から脱走した白馬が、追い矢に打たれながらも戻ってきました。息絶えた白馬はスーホの夢の中で、自分の亡骸で楽器を作るよう言い、そして出来たのが馬頭琴です。見開きの頁一杯に描かれた絵が、雄大なモンゴルの草原を表現すると共に、哀愁を漂わせます。